

日本

鉱工業生産指数（2020年5月）

新型コロナの影響を受け、19年平均の8割弱の水準まで低下

政策・経済研究センター

田中康就

03-6858-2717

1 鉱工業指数（生産）

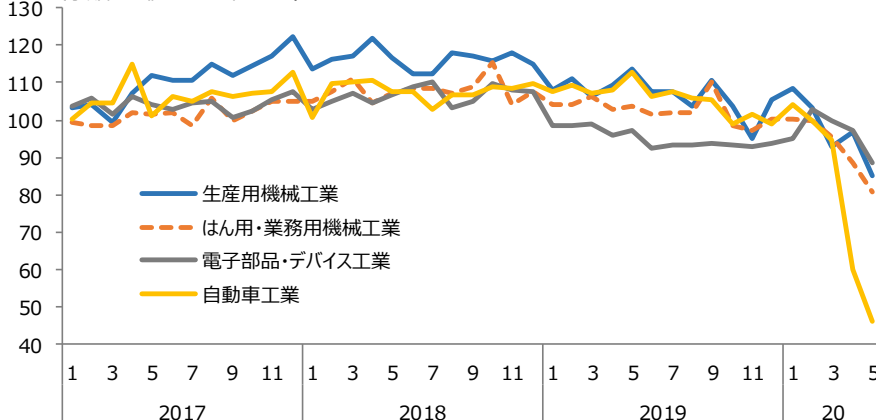
（季節調整値、2015年=100）



出所：経済産業省「鉱工業指数」「製造工業生産予測指数」

2 業種別の生産指数

（季節調整値、2015年=100）



出所：経済産業省「鉱工業指数」

評価ポイント

今回の結果

- 20年5月の鉱工業生産指数（速報）は、季調済前月比▲8.4%と、大幅に低下。4ヶ月連続での低下となり、19年平均の8割弱の水準まで悪化している。
- 業種別にみると、15業種すべてが減少。世界的な新型コロナウイルスの感染拡大が幅広い業種で需要を抑制した。
- 特に、メーカー各社が生産調整を行っている自動車工業（季調済前月比▲23.2%）は、減少率が大きく、生産全体を▲3.6%ポイント押し下げた。水準を見ても、5月の乗用車の生産指数は19年平均の4割程度であり、月次の統計（接続指数）が得られる1978年1月以降では、東日本大震災が発生した11年3月を下回る最低水準である。
- 電子部品・デバイス工業（同▲8.6%）は3カ月連続で減少し、減少ペースも加速した。19年末以降は世界的な半導体関連需要に持ち直しの兆しがみられたが、再び減少傾向に転じつつある。企業の投資姿勢が慎重化していることもあり、生産用機械工業（同▲12.0%）やはん用・業務用機械工業（同▲8.9%）も低下傾向が続いた。
- 製造工業生産予測調査によると、6月の生産は、企業の予測値と実績値の平均的なズレを経済産業省が補正した値が季調済前月比+0.2%程度となっており、低い水準が続くと予想されている。

基調判断と今後の流れ

- 生産指数は、世界的な新型コロナウイルスの感染拡大による経済活動の抑制を背景に、自動車工業を中心に大きく落ち込んでいる。
- 先行きの生産は、国内外で経済活動の再開を探る動きがみられる中、20年半ば以降は持ち直しに転じると見込む。もっとも、国内外ともに、①ワクチン・治療薬がない中では引き続き外出が一定程度抑制されるほか、②雇用・所得環境の悪化により家計の購買力やマインドも低下していることから、生産の持ち直しペースは鈍い可能性が高い。
- 生産の下振れリスク要因は、①新型コロナウイルスの流行長期化による世界経済の落ち込み長期化、②国内での再流行による外出・営業自粛要請の再強化が挙げられる。